

本日の学び:「ヤコブの傍らに立つ主」 テキスト:創世記28章10-22節

【理解の手がかりとして】

ベエル・シェバとはユダヤ南部、ハランはユーフラテス川上流の町。直線距離にしても1000キロくらいある。兄のエサウから命を狙われて、住みなれた地から命がけでの逃亡である。ヤコブは「とある場所に」（28:11）につき、そこで「日が沈んだので、その場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわ」（同）った。その場所は「ルズ」（28:19）と呼ばれていた町。

すると、彼は夢を見る。「先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた」（28:12）。これは実に興味深い描写である。神が地上の人間と交わりを持つための霊的な階段、のようなものか。

その霊的な交わりの中で、主がヤコブの「傍らに立って」（28:13）こう言う。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える」（28:13）と。アブラハム、イサクの神。そのお方が、今、アブラハムの孫であるヤコブにご自身を啓示され、ヤコブの神になろうとしている。そして、アブラハムに対する約束、土地と子孫の約束を与え継承させるという大いなる約束である。

さらに「あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る」（28:14）とも。これもまたアブラハムに対する約束の継承である。さらに「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」（28:15）との約束を受ける。寄る辺なき旅人であるヤコブは、ここで**神が共にいてくださる**という約束を受けたのである。彼がどこへ行こうとも、神が守ってくださるという約束である。

この「神が共にいてくださる」（インマヌエル）というのは、旧約・新約通じて聖書に通奏低音のように流れていることで、そこに「祝福」の本質があると思われる。本課の主題の「傍らに立つ主」というのもそのことを表している。

モーセへの主の啓示を思い出す。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである」（出エジプト3:12）と主はモーセに言われた。また神の名を訊くモーセに対して、主はこうおっしゃった。「わたしはある。わたしはあるという者だ」（同3:14）と。この「わたしはある」とは「わたしはあなたと共にいる神」という意味である。

ここでこの創世記を含むモーセ五書が編纂された時代についても踏まえておきたい。それは捕囚の時代のただ中であり、「神が共におられる」などとは信じがたい状況の中で、このヤコブの物語は、イスラエルの民の信仰を強め、大いに励ましたものと思われる。

さて、この聖書テキストは「天の梯子」として有名なところ。ヤコブはこの所を特別な場所として「ベテル（神の家）」（28:19）と名付けた。そして彼はその感動と共に「十分の一をささげます」（28:22）との決意を表明した。神の祝福、「主がわたしの神となられる」（28:21）への信仰的応

答である。

東日本大震災の経験を通られた佐藤彰牧師は次のように述べる。「ヤコブは『ここぞ神の家にほかならない』と言いましたが、実はここもそこも、どこに行っても何をしても、そこに神が伴っておられ、神のおられるところすべてが神の家であったのです。ヤコブの人生の特徴はこの点にこそあるでしょう。よく彼は行き詰まりました。八方塞がりの袋小路で身動きがとれなくなりました。しかしいつも天は開かれていたのです。どこに行っても、どの場所で行き詰まっても、決まって天は彼の人生に開かれていました。後に幸薄き人生であったことを自ら告白する(47:9) ような波乱万丈のヤコブの生涯ではありましたが、ただ彼の頭上にはどんなときでも絶えず天が開かれ、折々に光が差し込んでいたという点では、特別な天来の恵みに包まれた生涯であったと言えましょう。いつでも、どこにいても何をしても、そこに主がおられ天が開かれているならば、そこが私たちにとっての神の家(ベテル)です。今置かれているこの場所で、私たちも祝福されたいものです。」(佐藤彰『まるかじり創世記～祝福は苦しみの向こうに』)

震災後の教会と共に歩む佐藤牧師の弁である。捕囚のただ中でこのヤコブ物語を聞いたユダの民と、震災のただ中でこの物語を聞いた教会の民が重なり合う。「どこにいても何をしても、そこに主がおられ天が開かれているならば、そこが私たちにとっての神の家(ベテル)です。今置かれているこの場所で、私たちも祝福されたいものです」との思いを心に刻み、また「どこにいても何をしても、そこに主がおられ天が開かれている」との言葉に励まされ、また苦境の中にある一人ひとりにこの励ましが届くことを願い祈る。

『聖書教育』より

「先の見えない不安の中で、見えていなかった、ないと思っていた、しかし、実際はそこに存在しているものがある。孤独だと思っていたら、ずっと主が共におられたこと、そして、寄り添っている存在に気づくことがあります。」(聖書の学び～とある場所から)。

「聖書全体で、主に『あなたと共にいる』と語りかけられている人びとを思い起こし、また、その言葉を自分自身の体験として分かちあうことができるでしょうか。」(大人クラス) ⇒ 申命記31:23、イザヤ41:10、使徒18:9-10